

地域の学校で、共に育つ

2019 全国大会障がい児教育分科会レポート 田畑 美代子

〈何故、「共に」にこだわるのか〉

一緒に今を生きている人は、混ざり合って、互いが見える関係にいてほしいからです。私は、自分が見たこともないことを想像したり、近くにいない人の様子を考えることが苦手です。支援の必要な人と一緒にいる時間が多くなれば、どんな時に（支援の）手を出さか出さないかを考えることができ、動けるようになります。子どもたちも、同じではないかなと思います。それぞれが、お互いに、同じ場に居ることが当たり前という感覚に、自分もなりたいし子どもたちにもなってほしいと思っています。学校では、特別支援学級と通常学級と分けられることがあります。お互いが見える関係にあること、共に生活し学習することにこだわってきました。

NPO法人ピープルデザイン研究所代表の須藤シンジさんが、朝日新聞記者の取材にこのように答えています。「日本では健常者と障害者の場が分かれている。分かれた状態では、自分と異なる存在と知り合わない。それが『大変そう』『怖い』という心のバリアーにつながる。でも、誰もが混じり合い、互いの違いに慣れるだけで、その壁は消えていくと思います。」（朝日新聞 取材考記 「配慮」が「排除」にならないために）この言葉を聞いて、取材した記者は「弱者への配慮」がシステム化されることで、対話が生じづらくなっていると感じたと書いています。支援を必要とする人に「配慮」が必要だけど、それが「排除」に繋がりがかねないと。学校教育でいえば、特別支援学校や、特別支援学級、通級制度がシステムにあたるかと私は考えます。これが、子どもたちを分けることにつながり、存在が見えない関係を作り出してしまうことは、避けたいことです。

これまでに、「知らなかった」ためにおこった出来事や「一緒にいたからこそ」という出来事に、私も出会ってきました。

存在を知らなかったから

- ・「Aの赤ちゃん、おおきいなあ。」「赤ちゃんと違う、お兄ちゃん。」
- ・「Bさん、お兄さんがおる」（実際には訪問教育を受けていたお姉さん）
- ・「Cは一人っ子」（訪問教育を受けていた弟がいた）
- ・「きょうだいおるの」（養護学校にいるお兄さんがいることを知らない）
- ・就学指導委員会で就学相談の対象にならない。（保育所・幼稚園に行っていない）

いっしょに過ごした時間があつたから

- ・成人式の会場で「中へ入るぞ。お前も一緒に来い。」（小学校を一緒に過ごした）
- ・成人式の後、みんなで飲みに行った。（小中学校を一緒に過ごした）
- ・先生に会ったこと、〇〇さんにラインしとく。（小学校途中から通常学級、中学校も。県立高校）
- ・今日は、〇〇やよ。一緒に行こう。はい、ほうき。（小学校）
- ・〇〇は、それだけ食べたらいいやんか。おかわりしていいよ。（小学校）

・リレーのゴールデンコンビ。(小学校)

「高校になったら、みんなそれぞれの所へ行く。特別支援学校の高等部へ行くことになると思う。それまでは、小中はみんなと一緒に学校へ行かせたい。勉強教えてもらうより、友だちを作ってほしい」(成人式の後のみに行っていた人の母親) こういう声を聞くと、圧倒的多数の地域の学校の通常学級で、存在を認め合い「共に」学習することを目指したいです。

〈2017年度 2年生の実践〉

全体での確認

2017年度、立神小学校は、1, 2, 3, 4・5, 6年生5学級と特別支援学級2学級の7学級でした。特別支援学級は、4名が在籍する知的障害特別支援学級と1名が在籍する肢体不自由特別支援学級です。2年生は、両方の学級に在籍する児童も合わせて12名でした。支援学級の担任2人と支援員2人と共に、個々の子どもの発達を支援することと、子どもどうしをつなぐためにどんな支援をする(しない)のか、具体的には児童の時間割に合わせて大人がどのように動くのかを確かめることからスタートしました。

2017年度 時間割に関わる支援体制について

学年	名前	支援担任	支援員(介助員)
2	B (個別学習無し)	国語(書写を除く)週に2授業時間 T2としてかわる	算数・生活・音楽・図工 体育(1・2年複式) 学活・道徳(教科ではないけど) 英語(教科ではないけど)については、相談しながら。
3	C (個別学習無し)	国語(書写を除く)週に3授業時間 T2として (年度途中から個別指導あり)	算数・保健 理科・社会(校外学習に出る場合) 書写(学年始めのころに必要)
6	D (国語・算数・社会の時間に個別学習)	国語(書写を除く)・社会・算数・生活や自立の学習 理科・保健 英語(教科ではないけど学習内容が5年時と変われば) 総合(教科ではないけど、学習や活動の内容によって)	書写・音楽・家庭・道徳・学活・英語・総合(教科ではないけど) 体育(5・6年複式の場合 学年始めのころに)
6	E	単式で学習できれば支援は外す方向で。ただ、見守りは要るので、Dさんが原学級で学習するときには、支援担任や介助員が見守りを心がける	

Aさんについては、一人学級なので、担任が様子を見ながら国語と算数の時間は個別に

学習し、他は2年生教室で学習する。担任が出張等の場合は、2年生教室で学習する。

※生活の基本は、それぞれの学年の教室におき、支援教室へは通級の形をとる。

※Aさんは、登下校共に保護者からの引き渡しを基本に、見える範囲で子どもだけで歩く距離を伸ばしていく。

※Dさんは、登校時は途中から保護者と別れて、見守りだけ。下校時は保護者引き渡し。

※Bさん、Cさん、Eさん共に登校の様子は安定している。横断歩道の所で保護者と別れる。Dさんと一緒に見守る。ただ、犬がいた時のBさんの様子は普段と違っていたので、注意は必要。

※Bさん、Cさんの下校は保護者引き渡し。Eさんは自分で下校。

※Cさんの朝の始業前の見守り、Aさん・Dさんの朝の会、帰りの会の支援は必要。

※給食はどの学級も複数体制が取れたらいいと思う。ワゴンの数が増えると思うので、せめて年度始めは。

※休憩時間についてはびっしりと付く必要はないが、業間や昼休みなどそれとなく見守ったほうがいい。特に、Aさんは大人の目があるようにする。

「共通認識」と一言で言いますが、小さな学校でも意思の疎通は難しいことがあります。なぜ支援に入るのか、誰がどんな動きをしているのか、どんな支援をするのかははっきりさせることで、みんなが同じスタートラインに立てると思います。そしてそれは思っているだけでなく、見える形にしておくことが大事です。前年度支援学級の担任として子どもたちを見てきて、新年度に向けて原案を出しました。反省点は、自分が特別支援学級の担任をする時には、いつも通常学級の授業を持っていたのに、逆の立場になったときに要求しなかったことです。授業をすると、必要な支援や支援の仕方に気づくことができます。

2年生学級でどの時間にも共通の支援

・見通しを持たせる

毎月の予定を丁寧に知らせる。週の予定（一週間の時間割）を知らせる。一日の予定を知らせる。その時間の予定を知らせる。というように、常に次のことが分かるようになってきた。これは、Bの不安を取り除くためでもあり、他にも知らせた方が落ち着ける児童がいたので。

・指示や説明を分かりやすくする

漢字の熟語を使わず、平仮名言葉を意識した。1つの活動を1つの文（言葉）にし、活動が2つになったら、文も2つにした。また、「大事なことを言います」とか「3つ言います」というように、前置きをして話し、同じことは繰り返さないようにした。そして、話したことを箇条書きなどで見えるようにした。こうすることで、全員が聞く姿勢ができてきた。

・パターン化、ルーティン

国語の学習ならこう、算数ならこう、というように学習をパターン化して、変化は少しずつつけるようにした。Bのためでもあったが、初めてのことには動き出せない児童がいたので、安心して学習に入れるようになってきた。マンネリ化しないように心掛けながら、大きく変わるときには、「次は、今までと違うことをするから。」と、前時に予告した。そ

れでも、動けないときには、「見ていただらいい」「人がすることを真似して」と声掛けをして、無理強いしないようにした。学習の始まりに音読したり、計算練習したり繰り返すことで力をつけていった。

体育でも、学習を3つに分けて行うことはパターン化し、ラジオ体操はルーティンとして毎回やった。初めてのことに取り組めない子も、時間始まりの体操だけは参加できた。

体育で療育活動

体育の時間を3つに分けたなかに、療育活動（ムーブメント）を取り入れた。低学年の場合、週に3時間体育があるので、時間として少しの時間でも、繰り返していくと体の使い方が変わってくる。そして、自分の体を知ることが自己認識につながり、人の動きを見ることがやタイミングを合わせることができるようになることが、他者の存在を認識することにつながる。（ムーブメントの輪くぐりやスカーフなど）例えば、ゲームのようにして輪くぐりをする時に、頭からくぐるか足からくぐるかで、体をどのようにとらえているのか分かる。

国語の時間に

・音読の工夫

国語の時間の始まりは音読をした。全員で一斉にする音読もしたのだが、全員で一斉にすると、スピードについていけない子がいたのと、周りの声が気になり耳をふさぎ、声を出さないAの姿があったので、2人一組で互いの音読を聴きあう形にした。Bは、指名されて一人で読むときにも、小さな声しか出せずいたのだが、1対1の音読は、Bにとっては効果的だった。目の前にいる相手の声を聞けばいいので、耳をふさぐことなく聞くことができた。目の前にいる相手に届く声で音読することで、声もだんだん出るようになった。時間を1分とか3分と制限するけれど、読む量は指定しないようにしたので、ゆっくりな子はゆっくりと、速い子はたくさんの量を読んだ。Bは自分のペースで読みながら、負けず嫌いなところもあって、相手よりたくさん読もうとしたり、大きな声で読もうとしたりした。その結果、大きな声で音読できるようになり、音楽で歌う時にも声を出すようになった。これは、学級の雰囲気にも助けられた結果だ。Bが小さな声で読んでも、聞こうとする相手の子どもの姿があった。また、参観日に消え入るような声を出していたBに、保護者は「みんなの前で読めた」と認め、責めることはなかった。

指名読みをするときには、聞いている者には、指で文字を追わせた。私が読む速度をかえながら指で追わせることもした。少しずつ指から目へ変えていった。詩のときには、目で追いかける時に、横に追っていくこともした。この時に、「首を動かさないで、目だけ動かす」というようにして、ビジョントレーニングの要素も入れた。Bには家庭で並行してビジョントレーニングをしてもらった。Bをはじめ、読み間違えが多かった子の間違いが減っていった。Aも一緒の時には、音読と視写を中心とした学習をし、文字を指で追うことは大事にしていた。

・視写の工夫

国語のノートは、全員マス目の数をそろえて、写すものもマス目の数に合うようにした。教科書などで合わないときは、マス目をプリントするようにした。写すときに、1行ずつ

見ることができるように、どちらかはプリントで折ることができるようにした。Bは、一番上の文字だけなぞれるようにし、Aは全文なぞり書きから始めた。Bのほかにも数人、上の文字だけなぞれるようにした。なぞる文字を徐々に減らし、Aもなぞり書きから視写へ移った。

黒板に書くときは、子どもたちが持っているノートのマス目に会うように書いた。1マス目は赤の○で囲むようにして、横に読んで確かめたりした。算数の時にも、同じようにしていった。

・絵本の活用

絵本の読み聞かせは、個別の支援の時にも学級全体での時にも、有効だった。本を読む（聞く）、物語を読む（聞く）楽しさを知り、文字を追うことが楽しいと思える時間を作ることができる。また、言葉の持つ意味や表現の仕方を獲得することにもつながった。何よりも、同じ本を読む（聞く）時間を共有し、同じ場面で笑ったり怒ったりするのは、（もちろん違う場面でもいい）友だちの思いを感じることができる。

2年生の実践も含めて、忘れられない絵本。

「ノントン おねしょでしょん」・・・ノントンのシリーズ

「ぼちぼちいこか」・・・この本読むから、教室へ

「貨物列車たちのぎょうれつ」・・・自分から本を読むように

「どんなきもちかなあ」「それしかないわけじゃない」・・・多様性を願って

本を選ぶ時の参考書「クシュラの奇跡」「やさしさと出会う本」「いつも読みたい本ばかり」

「読み聞かせ この素晴らしい世界」「本・子ども大人」

生活科

自分の成長や友達の成長を感じることができるということを学習の目当てにして、「大きくなったわたしたち」の学習をした。幸い、全員が保護者の協力を得られたので、1授業時間の形を同じにして、全員が自分の時間として1時間使う学習を組むことができた。AもBも学校とは違う姿を周りの子どもたちに知らせることができた。既成概念が壊されるというと大げさだけど、友だちには、学校で見ている姿だけじゃないことが分かるのが大事だと思う。学校では同じようなことをする時間が多いけど、家ではそれぞれ違うことをしていて、家族の姿も違って、違うことが当たり前だと気付けるのがいい。

〈終わりに〉

とにかく分けることには反対して、一緒にいる時間が多ければいいと思っていた時もありました。今思うと独りよがりで自分中心の考え方だったと思います。一緒にいる時間の保障も大事ですが、一番大事なものは、集団の中に居場所を作ること、仲間づくりだと思っています。それは障がいの有無にかかわらずです。そして、学びを保障すること。教材や学習方法を工夫して、学習に参加できるようにすることが重要で、私たちはその力をつけるために学んでいるんだと思います。

資料

- 予定の通信
- 療育活動 ムーブメント、水泳
- 国語の授業案
- 絵本選択のための本
- 生活の通信 2枚